

Title	人種関係協会における反人種主義運動の射程：国民戦線と「暴力」をめぐって
Author(s)	稲垣, 健志
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2009 P.11-P.21
Issue Date	2010-05-31
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/77355
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

人種関係協会における反人種主義運動の射程

——国民戦線と「暴力」をめぐる——

稲垣 健志

1. はじめに

1949年、王立国際問題研究所（通称チャタム・ハウス）が行なったイギリス連邦関係会議において、急速に脱植民地化が進む国々の人種関係が初めて議題として取り上げられ、こうした国々における人種関係の悪化、また共産国側によるこうした人種感情の利用への懸念が議論された。翌年には後にサンデータイムズの編集長を務めることになるヘンリー・ホドソンが、このチャタム・ハウスにおいて「今日の世界政治には、他を凌駕する二つの問題がある。それは共産主義と自由主義民主主義の争いと人種関係の問題である。（中略）二つの問題は、われわれの文明が生き残る上できわめて重要である」¹（()内は筆者による加筆、以下同様）と演説し、人種関係に関わる問題を研究する機関の設立を訴えた。そして1952年、人種関係協会(the Institute of Race Relations)の前身となる機関が、王立国際問題研究所の一部局としてつくられた。さらに1958年にはイギリス連邦人種関係協会として独立した機関となる。独立機関となった後も、名称が示すようにイギリス連邦やアフリカ諸国などの（旧）植民地の人種関係を調査していくのであるが、イギリスにおいて移民に対するさまざまな暴力や嫌がらせが顕著になると、国内の人種関係が「発見」され、徐々にそういった問題にも目を向けるようになっていった。また季刊誌 *Race* や月刊誌 *Newsletter*（のちの *Race Today*）を発行し、自らの調査を報告するようになったのもこの時期からである。しかし60年代後半ごろまでの協会は、ナフィールド財団やフォード財団といったスポンサーの意向に大きな影響を受けていただけでなく、あくまで「公平」で「客観的」な調査・研究を主張する評議会がさまざまな決定権をもっていた。これに対し、スリランカからの移民一世で、協会の図書館司書であったアムバラヴァネル・シヴァナンダンを中心とした現場スタッフは、「自分の主張を表現する場がないブラックに、協会はその扉を開くべきである」、「協会は多人種なイギリス社会の要求に答える努力をするべきである」、「協会は大企業の利害から独立した機関であるべきである」と主張し、移民に開かれた独立組織を目指し対立した²。そして1972年4月18日の臨時全体会議において、シヴァ

¹ Henry V. Hodson. 'Race Relations in the Commonwealth', *International Affairs*, 26-3, 1950, p.305.

² Chris Mullard. *Race, Power and Resistance*, London / Boston / Melbourne / Henley: Routledge &

ナンダンらは大挙して押し寄せ、評議会の多数派に辞職をせまった。そしてその場で行なわれた採決により多数派は破れ、総辞職に追い込まれたのである。評議会のメンバーは一新され、人種関係協会は「人種関係の協会」から「人種主義に抗する協会」に「変革」し³、独自の反人種主義運動を展開していくことになるのである。

本稿では、このように72年の「変革」によって誕生した「新」人種関係協会の諸実践を包括的に考察する手始めとして、70年代当時の協会の反人種主義運動の射程を見定めることを試みる。具体的には、「対象としての人種主義」を、当時、反移民団体として台頭してきた国民戦線(National Front)に対する見解から、そして「行為としての人種主義」を人種関係協会が多大な影響を受けたブラックパワー運動に関連した「暴力」という観点からそれぞれ検討してみたい。

2. 国民戦線の台頭とイギリス社会

ここではまず国民戦線の台頭という現象を概観したあと、それに対するイギリス社会の反応を、反ナチ同盟による反国民戦線運動と二大政党による見解という点から確認しておきたい。国民戦線は1967年にそれまで散在していた極右団体が合同した結果生まれた組織で、ECからの脱退や移民の国外追放などを訴え、各選挙への候補者擁立と街頭デモを主な活動としていた。結成後数年は小規模な組織にとどまっていたが、70年代に入ると次第に支持を拡大し、当初1500人だったメンバーが73年には14000人に達していた。また各選挙においても躍進をみせ、73年5月のウェストブラミッジでの補欠選挙、6月のブラックバーン、レスターの地方選挙においては保守、労働党に次ぐ得票数であった。その後も国民戦線は選挙で成果を挙げ、76年におこなわれたブラックバーンでの地方選挙では、国民戦線のメンバーによってつくられた国民党(National Party)が2議席を獲得するにいたった。翌77年の大ロンドン市議会選挙では、計12万票を獲得し、特にタワーハムレッツ、ハクニー、ニューアムではいずれも10パーセントを越える高い得票率をみせた。こうした選挙での成果と同時に、国民戦線は移民の多い地区や都市などでの集会や街頭デモも積極的に行なっていた。

1970年代なかばのイギリスにおいて、限定的とは言え⁴、なぜ国民戦線はこのように勢力を拡大しえたのか。早くも70年代終わりごろから、この「国民戦線台頭の要因」を探る研究が多くなされているが、これらの諸研究によれば、大きく分けて2つの要因が考えられる⁵。ひとつは保守政治家イーノック・パウエル⁵の存在である。パウエルは1968年、イギリ

Kegan Paul, 1985, pp.26-28.

³ Joe Sim, Phil Scraton and Paul Gordon. 'Introduction: Crime, the State and Critical Analysis', in Phil Scraton (ed.), *Law, Order and the Authoritarian State: Readings in Critical Criminology*, Milton Keynes / Philadelphia: Open University Press, 1987, P.70.

⁴ 他のヨーロッパ諸国の極右政党とは異なり、国民戦線が地方議会・国会で議席を獲得することはなかった。

⁵ ここでは主に Martin Barker. *The New Racism: Conservatives and the Ideology of the Tribe*, London: Junction Books, 1981, Stan Taylor. *The National Front in English Politics*, London / Basingstoke: The

スの「人種的緊張状態」をローマ時代の民族紛争になぞらえた有名な「血の河」演説を行ない、イギリス社会における人種・移民を顕在化させた。当時の新聞各紙の世論調査によれば、約 6~8 割の人がパウエルの演説を支持し、ロンドンでは港湾労働者によるパウエル支持のデモが行なわれた。徹底した反移民発言を唱えるパウエルは、しかし、保守党の内閣から外され、最終的には党からも離れることになる。その一方で、国民戦線幹部たちはパウエル支持を表明し⁶、より語気を強めて「移民がわれわれの職を奪っている」「1945年の国籍法以降に入ってきた移民を追放する」といった単純明快な主張を展開して、人々の反移民感情を汲み取る役割をある程度果たしたと考えられる。もうひとつの背景は（もちろんこれはパウエルの演説とも深く関連しているが）、二大政党による人種・移民の非政治化である。国内の「人種間の調和」を目的とした人種関係法と、移民規制を目的とした移民法を保守・労働両政府が継承することにより、1960年代から70年代にかけて人種や移民といった議題を選挙や国会において政治的争点としない一方で、政府系組織を設置して人種や移民に関する諸問題をそこに丸投げするという「沈黙の共謀と緩衝材としての官僚組織」⁷に基づく二大政党の政策は、人々の反移民感情の受け皿とはならず、国民戦線の台頭をもたらした要因ともなった。

では、その国民戦線の台頭に対して、イギリス社会はどのような反応を示したのか。もっとも早く、またもっとも過激に対抗したのは、国際社会主義者(International Socialists)、のちの社会主義労働者党(Socialist Workers Party)であった。70年代前半から、両陣営はイギリス各地においてデモの衝突を繰り返し、毎回のように逮捕者や負傷者を出していた。特に1977年8月13日にロンドンのルイシャム地区で起こった衝突は、逮捕者214人、負傷者110人を出す大きな暴動へと発展した。この「ルイシャム騒擾」と呼ばれる出来事に対して、メディアは国民戦線のみならず社会主義労働者党の暴力性も批判した⁸。こうした批判を受けて社会主義労働者党は、より大衆的な運動の形成を模索し、その結果、1977年11月に反ナチ同盟(Anti-Nazi League)という団体が結成された。「反ナチ」という名称からもわかるように、反ナチ同盟は国民戦線をナチスになぞらえ、その「反ナチデモ」を行なう一方で、反人種主義ロック運動(Rock against Racism)とともに、反国民戦線、反人種主義を訴えるコンサートをイギリス各地で企画・開催した。こうした反ナチ同盟の活動は1978年の4月と

Macmillan Press, 1982, Zig Layton-Henry. *The Politics of Race in Britain*: London, George Allen & Unwin, 1984, Anthony M. Messina. *Race and Party Competition in Britain*, Oxford: Clarendon Press, 1989.などを参照。

⁶ 例えば幹部の一人であったジョン・ティンダルは「パウエル氏はその発言により、賞賛され支援されるべきであるし、氏自身も更なる発言に努めるべきである」(John Tyndall, *Six Principles of British Nationalism*, 1970².)と述べている。

⁷ Messina, op. cit., p. 21.

⁸ 例えば『デイリー・メール』は、後に労働党の党首となるマイケル・フットの次のようなコメントを掲載している。「ピンを投げたり、警察を攻撃することでナチスを泊めることはできない。ファシストと戦う上でもっとも無意味な方法は、彼らと同じようにふるまうことである。」(*Daily Mail*, 15, Aug., 1977.)

9月に行なわれた「反ナチスカーニバル」でピークをむかえる⁹。反ナチ同盟を中心とした反人種主義運動は、多様な人々を巻き込み、国民戦線に対抗する大きな力となったといえるかもしれない。しかし一方で、ポール・ギルロイが指摘しているように、反ナチ同盟（およびその母体である社会主義労働者党）は、反人種主義運動を階級闘争に収斂しようとし、人種には十分な関心を払っていなかった¹⁰。さらに反ナチ同盟が描いた、国民戦線をナチス/ファシストとみなし、その脅威からイギリス（国民）を守るという構図は、第2次大戦時のようなナショナリズムを高揚させ、かえって人種に関する議論を周縁化させた¹¹。結果として、1979年の選挙で国民戦線の衰退が明らかになると、人種主義の根本的な問題は棚上げされたまま、反ナチ同盟の「役割」もまた終わりをむかえたのである。

これに対して、二大政党の対応はいかなるものだったのか。まずは労働党についてみていくことにする。労働党は当初、国民戦線が得票数を伸ばしつつあるのは保守党支持の票が流れたものであり、自分たちの得票には影響がないと考え、国民戦線の台頭に対してやや楽観的であったが、一方で同党の全国執行委員会は、74年の総選挙に向けて「国民戦線の候補者と同じ壇上に上がらない、また同じラジオ番組に出演しない」よう候補者に勧告した。しかし国民戦線が74年以降も選挙や街頭デモで成果を挙げ、それが旧来労働党の強かった地域にも及ぶようになると、テレビや新聞などにおいて労働党議員たちは積極的に国民戦線を批判する発言をするようになっていった。そして76年の総選挙後に行なわれた党大会では、国民戦線について活発に議論がなされている。そのなかでゲリー・ラーナーという党員は、全国執行委員会のメンバーが出演したテレビ討論会にふれ、次のように述べている。

私は国民戦線やファシスト団体を、1930年代のオズワルド・モズリーとその運動に結びつけた箇所が非常によかったと思います。おそらくヒトラーやムッソリーニ、フランコとも結びつければ、よりわかりやすかったでしょう。このことに関して私たちに間違いはない。国民戦線はナチ戦線（Nazi front）なのです。（中略）最後に、私たちは1930年代に立ち返らなければならないと思うのです。私は当時うまれておりませんが、両親やここにおられる多くの方は違います。この国においてモズリー一派がどのように通りから一掃されたのか、振り返らなければならないのです。¹²

ラーナーは国民戦線をファシストやナチスになぞらえ、モズリーのイギリスファシスト連合が活発に活動をしていた1930年代を引き合いに出し対抗策を提言したのである。こうし

⁹ 『タイムズ』は1978年4月30日のカーニバルを「1930年代以降のイギリスにおいて最も大きな反ファシストのイベント」（*The Times*, May, 2, 1978）と形容している。

¹⁰ Paul Gilroy, *'There ain't no Black in the Union Jack': the Cultural Politics of Race and Nation*, Chicago, The University of Chicago Press, 1991(1987¹), p.115.

¹¹ *Ibid.*, p. 134.

¹² *Report of the Seventy-fifth Annual Conference of the Labour Party*, 1976.

た見解は、実際、党全体にも浸透していくことになる。それを示すように、翌77年、労働党は労働組合会議との連名で、まさにラーナーのセリフを引用したような *The National Front is a Nazi Front* という冊子を出し、「昨日はユダヤ人、今日は黒人、明日はあなた」という見出しをつけた。さらに78年には全国執行委員会の声明として、国民戦線への対応に関する冊子を出している¹³。そのなかで労働党は、国民戦線による人種主義的プロパガンダと脅迫は基本的人権と自由を否定するものであると非難し、治安維持法を強化することにより国民戦線を取り締まるべきだとした。この治安維持法とは、もともと1936年にイギリスファシスト連合を非合法化するためにつくられたものであった。当初、国民戦線に対して鈍い反応を見せていた労働党は、しかしながら、国民戦線が台頭していくにつれ、同党をファシストやナチスと名付けることによって社会の脅威とみなし、まさに1930年代のイギリスファシスト連盟に対して行なわれたように、治安維持法をもってこの「脅威」を取り払うことを主張したのである。

では一方の保守党はどうであったか。国民戦線が台頭してきた1970年代半ば、野党に甘んじていた保守党はあるジレンマに陥っていた。保守党大会における黨員ジョン・カーライルの次のような発言は、そのジレンマを端的に示していると言える。

彼ら（国民戦線）の政策は露骨に人種主義的で不快なものです。しかし同党にはわれわれの不明確な政策にうんざりした保守黨員たちが参加しており、そのため保守党の票を奪いつつあります。偶然所有したイギリスのパスポートを使って、今いる国を離れる者たちに避難所（sanctuary）を与え続ければ、子供たちはわれわれに感謝しなくなるでしょう。¹⁴

すなわち、保守党のジレンマとは、「移民問題」に対する明確な対応を示せない一方で、黨員や支持者が国民戦線へと流れていくという事態であり、換言すれば、どのように国民戦線と一線を画し、どうやってそこへ流れた人々・票を取り戻すかが、国民戦線をめぐる保守党の課題であったといえよう。こうした問題を解決する絶好の機会となったのが、1979年の総選挙であった。その選挙を翌年に控えた78年初め、テレビ番組に出演した保守党党首マーガレット・サッチャーは、移民が増加するイギリス社会を「水浸し」と表現したいわゆる「水浸し演説」をおこなっているが、ここで注目したいのは、同じ番組のなかでサッチャーが国民戦線にもふれている点である。

私は移民問題を選挙の争点にするつもりはありませんが、主要政党がこの問題について語ってこなかった、という感情が（この国に）あると思います。そして時には、われわれは人種偏見という誤った非難を受けているのです。（中略）私の見解では、これが人々を国民戦線へと走らせたひとつの要因です。こうした人々は国民戦線の目的に賛同してはいません。し

¹³ The Labour Party (Statement by the National Executive Committee). *Response to the National Front*, Sept., 1978.

かし少なくとも問題のいくつかについて語ってはいる、と思っています。われわれは主要政党なのです。もし人々を過激な方向へ向かわせたくないのなら、わたしは向かわせたくないのですが、われわれ自身がこの問題について語らなければならないのであり、この問題を扱う用意があるということを示さねばなりません。われわれはイギリス的な特徴を持ったイギリス国民なのです。¹⁵

サッチャーは、「水浸し」という言葉を使って移民をイギリスにおける社会秩序の脅威と捉える一方で、「過激派」と「主要政党」というラベルを用いて、「移民問題」への「主要政党」保守党の積極的関与を主張することで、「過激派」国民戦線から人々を引き戻そうとした。さらにこの「水浸し演説」の数ヶ月後、保守党の機関紙 *Politics Today* は「市民(citizen)を守る」という特集を組み、そのなかの「公共秩序への脅威」という項目で「秩序への脅威が社会主義労働者党と国民戦線の活動によって引き起こされている。両党はイギリスのあらゆるところで人種対立を悪化させ、利用している」と批判し、そして「過激派や他のグループがどんなに暴力で威嚇しようとも、罪のない市民の権利や財産は守られなければならない」¹⁶と「主要政党」の「責務」を訴えた。このように保守党は、移民と同様に国民戦線や社会主義労働者党もイギリス社会の「秩序」を乱し、市民・国民へ「脅威」を与えると批判した。周知のように、79年の総選挙では保守党が勝利し、サッチャー政権が成立することになるのであるが、81年の *Politics Today* では、まず「イギリスは立憲君主国として民主主義を謳歌してきた」と述べたうえで、その79年の総選挙を次のように総括している。

この制度上の連続性は、革命や暴力のイデオロギーに基づくプログラムや運動の受け入れを、イギリス人が繰り返し拒否することによって際立たせてきたことである。(中略) 1979年の総選挙は大衆の伝統を十分に確認するものであった。その選挙は現代の反民主主義諸政党の歴史のなかで、もっとも広範な介入を記録したが、すべてが完全に拒否されたのである。よく宣伝された国民戦線の303人の候補者は19万1706票しか集められず、全員が供託金を失った。マルクス主義左翼の100人を超える候補者も同様であった。¹⁷

保守党は、労働党のようにナチスやファシストという言葉は用いないものの、国民戦線は社会秩序を乱し国民の脅威となる存在であり、「民主主義国家イギリスの伝統」にはそぐわないものとした。保守党にとって79年の総選挙は、国民戦線やマルクス主義に対する「イギリス民主主義の勝利」だったと言えよう。そしてサッチャー政権の下、移民や国民戦線によって乱された「秩序」の「回復」が行なわれていくことになるのである。

¹⁴ *Annual Conference: National Union of Conservative and Unionist Associations, 1976.*

¹⁵ *The Times*, Jan., 31, 1978.

¹⁶ *Politics Today*, no.7, 1978.

¹⁷ *Politics Today*, no.13, 1981.

このように国民戦線の台頭をめぐる二大政党の対応の特徴は、言葉は違うが共に国民戦線を「社会の脅威」、「反民主主義」と捉えることで、自らと一線を画し、そしてこれを取り締まる法律を強化していくことにあった。

3. 国民戦線と国家的人種主義

第2章で取り上げたような国民戦線をファシストとみなす見解は、人種関係協会においてもある程度見受けられた。例えば、1973年、カンタベリーでの国民戦線の集会に反対して行われたケント大学の学生を中心としたデモを、*Race Today* はこう報告している。

1973年の終わり、国民戦線はケント州カンタベリーでの集会を計画した。100人以上の労働者と学生が、反ファシストのスローガンを叫びながらホールの入り口に押し寄せ、ファシストたちが中に入るのを阻んだ。お決まりの服装に身を包んだ警察は、ヒトラー主義者のウェブスターと彼の凶徒たちを含む約40人のファシストのため、デモ参加者たちの間を無理やり前進した。¹⁸

国民戦線の指導者の一人であったマーティン・ウェブスターをヒトラー主義者と呼び、そのメンバーをファシストの凶徒(thug)と非難している点においては、確かに反ナチ同盟や二大政党などの見解とさほど変わらないと言えるかもしれない。もうひとつ別の例をみてみよう。*Race Today* には、すでに1960年代終わりから国民戦線の活動に関して、特に各都市でのケーススタディ的な報告が多く記載されている。1971年にジョン・アーミティジはイギリス北部の町ハッダーズフィールドにおける国民戦線について報告している。この中でアーミティジは国民戦線の信条やメンバーの人的特徴にも触れているが、しかし、「国民戦線はファシスト」と一蹴しているわけではない。むしろ強調しているのはハッダーズフィールドにおける同党の政治的重要性であり、その根拠として挙げているのは選挙での高い得票率だけではなく、地方政治における保守党への影響や両党の結びつきであった。アーミティジはこう呼びかけている。

国民戦線のような集団が活動的であるウルヴァーハンプトン、ブリストル、ロンドンの人々にとって、まずやるべきことはそうした組織の性質を理解すると同時に、それらが地域の政治・経済構造のどこに足場を置いているのかを正しく認識することである。¹⁹

アーミティジの力点は国民戦線そのものではなく、あくまでハッダーズフィールドという場の政治であり、その中で国民戦線がどういう役割を果たしているのかという点にあった。国民戦線の台頭という現象が各都市レベルにおいて分析されていた70年代前半に対し、第

¹⁸ *Race Today*, 6-8, 1974.

¹⁹ John Armitage. 'The National Front in Huddersfield', *Race Today*, 3-10, 1971.

2章でみたように、国民戦線の拡がりや反国民戦線の運動が全国規模化していった70年代後半には、その現象がイギリスという国家レベルで分析されるようになっていったが、ある意味において、こうしたアーミテージの視点は継承されている。

1977年、人種関係協会のメンバーであり劇作家でもあったデイヴィッド・エドガーは、「国民戦線の台頭」という現象を国家レベルであつかった論文を発表している²⁰。その冒頭でエドガーは、やや暗示的に「次の4月20日（1978年4月20日）は、アドルフ・ヒトラーの89回目の誕生日にあたる」が、「おそらくより重要なのは、イーノック・パウエルが大量の血であふれているテヴェレ川を見た日から10年をむかえることである」と述べている。パウエルの「血の河」発言以後の10年間、移民法と人種関係法が制定・強化され、職をめぐって白人と黒人が対立し、そして反移民団体として国民戦線が立ち現れた。一方で国民戦線に抗する反ファシスト運動も活発化し、国民戦線の人種主義をナチスのものと同等視して運動を展開している。エドガーはこう概略した上で、「しかし、この過去10年の歴史をさらに別の見方で解釈することが可能である」という。すなわち、「反移民圧力団体としての国民戦線の影響力は取るに足らない、その人種政策は国家による政策と根本的に一致しない、（中略）そして1930年代のドイツにおけるユダヤ人と今日のイギリスにおけるブラックを単純に同一視することは誤っており誤解を生じさせる、と主張できるのである」。エドガーにとって、国民戦線はファシストではあるかもしれないが、決してナチスではなかった。それは国民戦線にナチスの要素があるかどうかという点においてではない。国民戦線とナチスの決定的な違いは、それが国家的プロジェクトであったか否かという点であった。であるからこそ、パウエル発言後の10年を国民戦線の台頭という現象に収斂させてはならず、イギリスという国家による人種主義に対する批判的視点を持った解釈が必要だったのである。エドガーによれば、ブラックにとって国家と国民戦線のどちらが主要で喫緊の敵かという問いは間違っており、「両者の違いを理解することが、協力的かつ同時発生的な闘争」を差し迫ったものにするのであった。国家的人種主義という視点を欠き、ことさら「国民戦線はナチスである」と強調した当時の反人種主義運動に対する「戸惑い」や「懸念」²¹は、人種関係協会の年次報告でも述べられている。

われわれは、ファシズムに対する広範な抗議を展開する反ナチ同盟が今年結成されたことを歓迎する一方で、反ファシスト闘争におけるブラックと反人種主義者の重要性を維持するという人種関係協会に課せられた重い責務を実感している。人種主義が活動を活発化させ社会的地位を獲得する道を残したまま、「反ナチズム」が新たな一時的流行となる傾向がますます高まってきている。²¹

人種関係協会での国民戦線に関する議論において逆説的に強調されているのは、地方政治

²⁰ David Edgar. 'Racism, fascism and the politics of the National Front', *Race & Class*, 19-2, 1977, pp. 111-131.

も含めた国家的制度的人種主義である。それは人種主義が権力と結びついた時に発動される暴力であり、70年代の協会にとっては、移民を規制する移民法、イギリス社会における「人種関係」という枠組みの固定化を目指す人種関係法、そして警察による人種主義的な取り締まりなどがその最たる例であった。国民戦線についても、エドガーの指摘したような国家と国民戦線がきちんと区別できる状況から、80年代に入り「保守党が国民戦線の制服を盗んだ」時、つまり国民戦線の要素と国家が結びついた時、「イギリス社会はファシスト同然」²²に変容させられるのである。

こうした「対象としての人種主義」に対して、次章では「行為としての反人種主義」という点を「暴力」という観点から検討してみたい。

4. actionとしての「暴力」、reactionとしての「暴力」

1978年秋、ロンドンのベスナルグリーン・ステップニー労働組合評議会は一冊の冊子を発行している。額から血を流して倒れている人間が表紙に載せられたこの冊子では、76年から78年8月までにロンドン中心部において108件の人種的暴力被害があったとして、その被害者や状況などが詳しくリストアップされた²³。さらにこの冊子では、当時イギリスにおいて最大のアジア系移民団体であったパキスタン組織常任協議会、インド労働者協会、バングラディッシュ組織連盟が連名で「今や私たちは、仲間に対して自己防衛に目を向けるように訴えかけるときが来たと信じている。イギリスの主なエスニック・マイノリティ集団は実際的な意味において、お互いを支えあっていくべきである」と呼びかけている²⁴。こうした冊子が示しているように、当時の移民は日常的な目の前の暴力という問題を突きつけられていた。ここで取り上げる「行為としての反人種主義」とは、そうした暴力にどう抵抗するのか、つまり「暴力に抵抗するための暴力」ということになる。とりわけこの点が重要な意味を持つてくるのは、人種関係協会を含めた1970年代イギリスにおける移民の反人種主義運動が、「暴力」というイメージが付きまとうアメリカのブラックパワー運動に大きな影響を受けているという文脈においてである。

マーティン・ルーサー・キングが指導的立場にあったアメリカの公民権運動は、白人との「妥協的態度」や非暴力という「弱腰」といった批判が黒人内部から起こり、徐々に力を失っていった。そしてポスト公民権運動として台頭したのが、「暴力」を肯定するマルコム X に影響を受けたブラック・パワー運動であり、とりわけ銃で武装した兵士にシンボライズされたブラック・パンサー党であった。イギリスにおけるブラックパワー運動の影響は、すでに1960年代の終わりから見受けられ、いくつかの反人種主義移民団体の結成とし

²¹ *Annual Report of the Institute of Race Relations 1977-78*, 1978.

²² A. Sivanandan. 'Challenging Racism: Strategies for the 1980s', in *Communities of Resistance: Writings on Black Struggles for Socialism*, London: Verso, 1990, p. 69.

²³ Bethnal Green and Stepney Trades Council. *Blood on the Streets*, 1978.

²⁴ *Ibid.*, p. 95.

て結実した²⁵。1972年の人種関係協会の「変革」もこの文脈上にあると言えよう。

シヴァナンダンはこのブラック・パワーを一種のメタファーとして捉えている²⁶。すなわち、アメリカにおける「ブラック」を、その共通の歴史・経験に基づいて連帯させ、白人支配と闘争するための戦略としての政治的メタファーである。シヴァナンダンは1960年代のアメリカにおけるブラックが、その苦境を脱するためにはこういった戦略が不可欠であったと指摘している²⁷。さらにイギリスやアフリカ諸国でも同時多発的に起こったこのブラックパワー運動が示しているのは「白人ヘゲモニーの終焉」であった²⁸。白人ヘゲモニーとはすなわち植民地主義の歴史であり、それについて語るとき、シヴァナンダンはブラックパワー運動を飛び越え、フランツ・ファノンにまで立ち返っている。彼はファノンの著作、特に『地に呪われた者』（とジャン＝ポール・サルトルによる序文）に依拠しながら、「ほぼ500年にわたって、ヨーロッパがアフリカ、アジア、アメリカ（北と南）の国々を破壊・略奪し、自らの宗教や文化を押し付け、人々を拘禁してきた」植民地主義の歴史を語るののである。ブラックパワー運動が植民地主義の終焉（の始まり）を予感させた時、脱植民地化をめぐるファノンの議論はシヴァナンダンにとって、よりリアリティのあるものとなった。ファノンが脱植民地化から独立への過程における対抗暴力の重要性を唱えたように、シヴァナンダンも暴力を捨てることはなかった。いや、捨てることはできなかった。というのも、シヴァナンダンにとって植民地主義の歴史は「action と reaction、つまり暴力と対抗暴力の連続性」であり、そしてその連続が白人の側から始められた以上、自分たちにとって「暴力は選択の問題ではなく、選択の余地はないという事実の現れ」²⁹だからである。

では、現代において action と reaction の連続性とは、どのようなものが想定されるのか。現代における action としての暴力についてシヴァナンダンはこう指摘している。

われわれの時代における暴力とは、あからさまである必要もなければ、暴力と認識されるように目立つ必要もない。というのも、貧困が暴力であり人種主義である。そして貧困と人種主義の結びつきは我慢できないほどの暴力なのである。³⁰

²⁵ この点については、Floya Anthias and Nira Yuval-Davis. *Racialized Boundaries: Race, Nation, Gender, Colour and Class and the Anti-racist Struggle*, London / New York: Routledge, 1992, pp. 140-146.を参照のこと。

²⁶ A. Sivanandan. 'Black Power: the Politics of Existence', in *A Different Hunger: Writings on Black Resistance*, London: Pluto Press, 1982, p. 57.

²⁷ 一方でシヴァナンダンは、ブラックパワー運動の一部にみられる「ブラックナショナリズム」には批判的であり、その対極に人種に関心を払わない「ホワイトマルクス主義」を置き、人種と階級を接合させた運動を目指した。この点に関してシヴァナンダンはC.L.R. ジェイムズから大きな影響を受けている。ジェイムズのブラックパワー運動に対する見解は、C.L.R. James. 'Black Power', in Anna Grimshaw (ed.). *The C.L.R. James Reader*, Oxford: Blackwell, 1992, pp. 362-374.を参照のこと。

²⁸ *Ibid.*, p. 64.

²⁹ *Ibid.*, p. 65.

³⁰ *Ibid.*, p. 65.

現代における暴力は、旧態依然とした剥き出しの身体的攻撃という形よりも、一見して「暴力的」とは認識されないような巧妙化した形をとる。シヴァナンダンが言う「貧困」しかり、前章でふれたような「法律」「制度」「権力」に基づいた移民の「管理」「包摂」「排除」もしかりである。こうした action に対する reaction もまた、しなやかに多様化させる必要があるのであり、シヴァナンダンはその実践例をブラックパンサー党の活動にみている。すなわち「もし警察がコミュニティをパトロールするなら、警察をパトロールする。もし彼らが銃を突きつけてきたら、彼らに銃を突きつける」だけでなく、「もし法律が容赦ない仕打ちをしてくるなら、法律を使ってそれを防ぐ」ことや「もし子供が飢えていたら、仕事をボイコットし、ブラックコミュニティにおける搾取を公にすることで地域の黒人資本家をつるし上げ、そして子供たちに食料を与える」³¹ことも reaction なのである。シヴァナンダンにとって action としての暴力を自ら行使することは想定しえない。あるのは action としての人種主義的暴力に対する reaction としての反人種主義的「暴力」だけである。そして、単純化を恐れずに言えば、action である人種主義がたとえどのような形を取るにしても「暴力」であるならば、その reaction である反人種主義もまたどのような形であれ対抗「暴力」なのである。

5. おわりに

本稿では、1970年代における人種関係協会の活動の射程を、「対象としての人種主義」と「行為としての反人種主義」にわけて確認してきた。繰り返しになるが、国民戦線をめぐる協会の見解から見えてくるのは、「ファシストの脅威」ではなく、国家的人種主義の「脅威」である。それは旧来的な暴力的人種主義ではない。「法律」や「制度」で身を固めた一見すると暴力とは映らない人種主義であった。このような巧妙化し多様化する action としての人種主義に対抗する、reaction としての反人種主義もまたさまざまに形をかえた対抗「暴力」でなければならない。

このようにその射程を定めることによって、はじめて協会の諸実践の具体的な考察が可能となるのである。移民法、人種関係法、警察の取り締まりといった action としての人種主義をめぐる協会の見解はいかなるものであったか、そしてそういった国家的制度的人種主義に対する reaction としての反人種主義はどのように想定され、そして実践されたのか。70年代から80年代へという時代、すなわち労働党政権からサッチャー政権へ、福祉国家体制の崩壊から新自由主義時代へと移行していく時代における、移民によるこうした反人種主義運動の実践に接近していくことが次の課題となる。

³¹ A. Sivanandan. 'Huey Newton and the Black Renaissance', in *A Different Hunger: Writings on Black Resistance*, *op. cit.*, pp. 67-68.